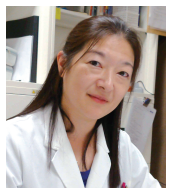
日本緩和医療学会

徳洲会グループから15演題

テーマは「こえをきき、ともにつくる」

第31回日本緩和医療学会学術大会が6月19日から2日間、福岡市で開かれた。テーマは「こえをきき、ともにつくる」。徳洲会グループは15演題を発表した。一部を紹介する。



前部長は、がん疼痛に対する脊髄鎮痛法の要諦を配信で解説



田畑看護師は島の緩和ケアの質向上に努める取り組みを発表



どさんコロジーの活動から北海道での遠隔緩和ケアについて発言する藤原院長

「麻酔科医が伝えたいこと～知っておいてほしい周術期のオピオイド管理と神経ブロック～」をテーマとするシンポジウム（オンデマンド配信）で、中部徳洲会病院（沖縄県）の前知子・疼痛治療科部長が「知っておいてほしい神経ブロック―がん疼痛に対する脊髄鎮痛法の適応と実践」と題し発表した。

はじめに、厚生労働省も神経ブロックなど専門的治療を薬物療法のステップにかかわらず考慮するよう促している状況を報告。薬物療法を補完・最適化する侵襲的鎮痛法の役割が、より重要になることを強調し、脊髄鎮痛法を解説した。

前部長は、硬膜外鎮痛法と脊髄くも膜下鎮痛法について、それぞれの特徴や概念、位置付けを説明。オピオイド（麻薬性鎮痛薬）治療や他の神経ブロック療法との関係性も示し、適切な導入時期や事例をふまえ活用の視点を提示した。オピオイド増量に依存するのではなく、こうしたがん疼痛に対する専門的治療を早期から選択肢として共有することを呼びかけた。

「緩和ケア領域における診療ネットワーク構築―今あるものを、活かし、つなぎ、広げる」をテーマとしたパネルディスカッションでは、徳之島徳洲会病院（鹿児島県）の田畑幸利看護師が「離島に緩和ケアを広げる―徳之島緩和ケアアウトリーチの取り組み―」と題し、2019年4月から取り組んでいる緩和ケアアウトリーチを紹介した。アウトリーチは、専門家や関係機関が一般社会に出向いて積極的に教育や啓発、支援などを働きかける活動。

はじめに徳之島や自院の特徴を紹介した後、緩和ケアアウトリーチ活動を開始する前の終末期に関する島の状況を提示。緩和ケアという概念や方法がなく、患者さんの意思決定支援やACP（人生会議）を行わなかったり、在宅療養生活をあきらめたりするなど「さまざまな課題があった」と振り返った。

こうしたなか、同院の循環器内科医師が知人の緩和ケア医師に相談し、島内で緩和ケアをテーマにした講演を開催。それが契機となり、緩和ケアアウトリーチプロジェクトが発足。緩和ケアを専門とする医師10人でチームを組み、「臨床」、「教育」、「啓発」を三本柱に掲げ、活動を開始した。

具体的には、緩和ケア医師が毎月2～4日の交代制で来島し、医療者と緩和ケアチームでの回診や訪問診療を実施。緩和ケア医師不在時はICT（情報通信技術）を活用して相談する。院内外の医療・介護福祉従事者や地域住民への勉強会も実施。日本ALS（筋萎縮性側索硬化症）協会鹿児島支部や行政、鹿児島県がん診療連携拠点病院など外部機関との連携強化にも努めていることを明かした。

これらの活動により、18年は19人だった在宅看取り件数が22年は62人に増加。その後も40人前後で推移していることを示した。在宅で亡くなるがん患者さんの割合や平均在宅療養日数も増えていることから、以前よりも過ごしたい場所で長く過ごせるようになった可能性を示唆した。ただし、「島内での緩和ケアの文化の醸成は進んだものの、文化の定着には至っていない」と、さらなる飛躍を誓った。この他「緩和医療におけるダイバーシティ＆インクルージョンの実装：バリアの可視化と実践知の共有」と題する委員会企画でも演者として登壇した。

「遠隔緩和ケア～コンサルテーションと遠隔医療～」と題するワークショップで、ホームケアクリニック札幌の藤原葉子院長が発表した。テーマは「北海道における遠隔緩和ケアの試み～どさんコロジーについて～」。

はじめに、どさんコロジーについて紹介。緩和ケアに関心をもつ医療従事者対象のネットワークで、25年に北海道で発足。緩和ケアに関する相談や情報交換を目的としたメーリングリストも運用し、登録者や月1回の定例会（北海道地域緩和ケア研修会）出席者を“どさんコロジスト”と呼び、場内の参加者にも参加を促した。

そのうえで具体的な活動に言及。緩和ケアに関する勉強会や医師のキャリアパス説明会、オール北海道で取り組む緩和医療専門医研修システム「北海道広域研修プログラム」の創設、交流企画集会など多岐にわたることをアピールした。定例会は、過去18回開催し、延べ参加者は2,538人。“顔の見える関係”ができあがりつつあり、最近は個別に寄せられる相談が増えている状況などを報告した。

実際にメーリングリストでアンケート調査を行ったところ、この1年で緩和ケアの症例や症状緩和について相談することが「増えた」とする回答が「変わらない」とする回答を大きく上回ったことを明示。「専門家であるかどうかを問わず相談が増えることは良いこと」とし、遠隔緩和医療連携が軌道に乗るには「まずは相談しやすい環境づくりが重要」とし、あらためて定例会の有用性を強調した。

藤原院長は「北海道地域緩和ケア研修会『どさんコロジー定例会』に対する医療介護従事者のニーズ」と題し、ポスター発表も行った。また徳洲会グループの8施設が計10演題をポスターなどで発表した。

湘南鎌倉医療大学後援会が和田新会長にバトンタッチ



任期満了による役員改選で田子前会長（前列左から2人目）から会長職を引き継いだ和田新会長（前列左）

湘南鎌倉医療大学（神奈川県）後援会は6月14日、2026年度通常総会を開催し、22年の同後援会発足以来、会長を務めてきた田子祐司会長の任期満了にともなう役員改選を行い、新たに和田博樹・事務局長（神奈川徳友会副会長）を会長に選出した。また、25年度の事業報告や収支決算、26年度の事業計画案や収支予算案を審議し、いずれも承認。学校法人徳洲会の福島安義理事長（医療法人徳洲会最高顧問）や荒賀直子学長が来賓として出席した。

同後援会はこれまで、入学・卒業する学生へのお祝いの贈呈や年2回の会報発行、車両の寄贈、玉縄桜の寄贈など積極的な活動を展開。

和田新会長は「後援会の基礎づくりに尽力いただいた田子会長には感謝の気持ちでいっぱいです。今後さらに後援会を充実させてまいりたいと思います。さらに“目に見える後援活動”をモットーに、大学、学生さんと地域、病院、その他関係各所との橋渡し役となり、大学の発展、学生生活の充実に尽力してまいります」と意気込みを示し、会員や関係者に向け「さらなるご協力をいただきますよう、お願い申し上げます」と呼びかけた。

福岡病院薬剤部

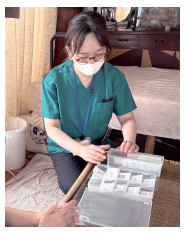
若手薬剤師へ在宅研修

地域の薬局と連携し訪問に同行

福岡徳洲会病院の薬剤部は、今年度から薬剤師3年未満のスタッフを対象に、新たに地域研修を実施している。具体的には、地元のサンワ調剤薬局と連携し、同薬局薬剤師による個人宅への訪問調剤に同行するほか、11施設を訪問・見学する。患者さんの退院後の生活を具体的にイメージし、院内での業務に生かすことが狙い。

同院には現在、3年未満の薬剤師が10人在籍し、2人1組に分かれ、各グループが2週間に1回、2軒訪問する。訪問先では、患者さんとコミュニケーションを図りながら状態をアセスメントし、薬の準備やアドバイスなど行う。報告書の作成も行い、指導する薬局薬剤師の添削も受けなければならない。

原則、同じ患者さんを訪れるように薬局側が調整。カリキュラムの内容も、患者さんへの処方など薬剤に関するものから、医療保険・介護保険の在宅療養に関する法制度の理解まで多岐にわたる。



研修で患者さん宅に訪問し、薬剤指導を経験する福岡病院の須藤詩乃薬剤師



連携して地域で薬剤師を育成！（前列左から下川薬剤師、山下副主任、藤薬剤師、後列は渡邊部長）

すでに1回訪問を経験した下川陽菜薬剤師は「退院後の患者さんの服薬状況を見るのは初めて。同じ薬でも薬局薬剤師とは見方が違うと感じました。病院では看護師さんなどが薬を飲ませてくださるので、あまり考えたことはなく、とても勉強になりました」と刺激を受けた様子。先輩の山下大貴副主任は「研修後、どう意識が変化するか楽しみです」と成長を期待する。

受け入れるサンワ調剤薬局の藤直子薬剤師も「入院中の患者さんは治療が中心になりますが、病院を一歩出れば生活が中心。私たちも日頃から単に薬の配達にならないことを心がけています。研修に来てくださる方は、退院後の生活を想像できるようになってもらえたらうれしいです。自分たちも業務を見直すきっかけになり、成長できています」と笑顔。

同院の渡邊裕之・薬剤部長は「しっかり教えてもらったほうがいいと、訪問調剤の実績が高いサンワ調剤薬局にお願いしました。地域で患者さんを支える意識が芽生えることを期待しています」。

湘南鎌倉病院が親子イベント

体験とクイズで楽しく学ぶ



会場の子どもたちにクイズを出題する関根部長

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）は6月27日、県内で「親子で学ぶ医療のひろば」を開催した。同イベントは地域の方々に向け、医療や健康に関する知識を親しみやすく届けることが目的。体験型プログラムや塗り絵コーナーも好評で、多くの親子連れでにぎわい、楽しみながら医療への理解を深める機会となった。

講演では、関根一朗・救急総合診療科部長が会場の子どもたちを巻き込みながら、クイズ形式で楽しくけがの応急手当や適切な救急要請の判断基準を解説。杉本幸子・睡眠障害内科部長は、成長に必要な睡眠時間や体内時計を整えるコツなど、子どもの健康な成長に欠かせない睡眠の重要性や正しい生活習慣について説明した。

さらに、大山祥子・音楽療法士と古木健太郎・認知症看護認定看護師が「親子で楽しむ音楽あそび」も実施。歌やダンス、楽器遊びをとおして親子が音楽を楽しみ、子どもたちの自然な交流が生まれるなど、会場は笑顔に包まれた。

WEB医療講演スケジュール

Facebookで公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！